

本会顧問 中原与茂九郎名誉教授計



本会顧問中原与茂九郎京都大学名誉教授には、去る三月二十七日未明、脳内出血のため、自宅で逝去された。享年八十七歳、あと二十日で満八十八歳の誕生日を迎えられる筈であった。先生は西暦千九百年のお生れであり、二千年を迎えることを目指す『三世紀会』のメンバーとして、なお矍鑠としておられたが、天命とあっては如何ともしがたい。ここに謹んで哀悼の意を捧げる次第である。

先生は倉敷市の御出身、岡山中学校、第六高等学校を経て、大正十四年三月京都帝国大学文学部史学科（西洋史学専攻）を御卒業、ただちに文学部副手を嘱託されたが、翌大正十五年三月、新

設の広島高等学校教授に任ぜられた。やがて昭和四年五月より同五年九月まで、アッシリア学研究のため文部省留学生としてオックスフォード大学に留学、A・H・セイスおよびS・ラングドンの両碩学の指導の下に、アッシリア学・シュメール学の研鑽をつまれた。この留学は、セイス教授と浜田耕作教授との推薦によるもので、これら三先生の学恩は先生の終生説いて倦まなかったところである。

第二次大戦後の学制改革によって昭和二十四年八月広島大学教養部教授に任ぜられ、間もなく昭和二十六年四月、母校京都大学においてアッシリア学・シュメール学の後継者を育成せんとの熱情に燃えて、京都大学教養部教授として着任された。爾来昭和三十八年四月十六日に定年退官されるまで十二年間、西洋史担当の草創期教養部教授として同部の充実・発展に尽力される一方、文学部と大学院文学研究科において特殊講義とシュメール語講読を担当、後進の指導・育成にあたられた。最初の講読の時間に、旧陳列館二階西側の小教室に学生の数にも増して故貝塚茂樹教授、佐藤長助教授、佐藤圭四郎助手などの先生方が出席されて、シュメール語学とアッシリア学に対する並々ならぬ興味と関心と、斯学の京都大学文学部における再出発に祝意を表わされたことは、われわれ学生に強い印象を与えたことが昨日のことのように想起される。先生の京都大学御在任半ばの昭和三十二年に故足利惇氏教授を会長、宮崎市定教授を副会長として、「西南アジア研究会」が発足、会誌『西南アジア研究』が創刊され、先生も足利・宮崎

両先生と並んで「西アジア学の発祥」と題して、オックスフォード大学クウインズ・カレッジのA・H・セイス教授の京都帝国大学文科大学における大正六年十月から十二月にかけての六回にわたる特別講義「パピロニアにおける初期住民の言語と文学」について手記を寄せられ、セイス・浜田両先生の文章のほか、故新村出先生の文をも引用して、此の記念すべき事業に後進の注意を促されたのであった。

退官されると直ちに立命館大学文学部に大学院担当教授として迎えられ、昭和四十七年まで後進の指導につとめられた。晩年は広島市西側に居を構えて悠々自適の生活を送られ、先生の広島再住を機として昭和四十八年に結成せられ、主として広島大学と京都大学において開かれる「シュメール研究会」と、以文会への出席を楽しみにしておられた。

先生は、セイス、浜田両先生の間の大正六年に遡る国際的交流のあかしである、京都帝国大学所蔵のウル第三王朝時代のシュメール語文書の公刊 (*The Sumerian Tablets in the Imperial University of Kyoto, Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 3, Toyo Bunko 1928*) と文部省派遣留学生という、当時としては最も輝かしい学問的スタートをきられたが、我が国におけるアッシリア学・シュメール学研究の創始者・開拓者としての先生の歩みは、開拓者の常として、ましてや楔形文字による古代メソポタミア史研究という、文明国としてはなおざりにできない研究領域でありながら、そのような分野に踏み込

むだけで奇人あつかいをされかねない研究領域を、戦前の我が国の土壌に根づかせようとするものであるだけに、困難にみちたものであったに違いない。研究対象は時代的にはシュメール初期王朝期からアッカド時代・ウル第三王朝を経て、古巴ビロニア時代まで、分野的には支配イデオロギーや宗教・思想の問題から社会経済に至るまで、言語的にはヘブライ語・カナン語まで拡がるのも、先生の関心の広さを物語ると同時に、数少ない本格的アッシリア研究者への期待の大きさを物語るものと言えよう。

先生の学問的業績の最高揚期は昭和三十三年、四年から昭和四十三年まで、先生五十八、九歳から六十八歳にいたる十年であろう。京大教養部時代には初期王朝期からアッカド時代にかけての行政・経済文書、特に土地制度に関連する優れた個別研究が相つぎ、さらに後半にあたる立命館時代には、初期王朝期Ⅲ期末期に属するラガシュ文書を遡って、初期王朝期Ⅰ期とされてきたウルの古拙文書、ジャムデット・ナスル期文書、さらには都市文明創始期のウルク末期の古拙文書への親炙に基く独創的研究が踵を接し、シュメール史学に新しい地平を拓くのである。それは古典的な神殿経済論に捉われずに、ウルク文書等から原史時代に世俗的支配権を行使する支配者が出現していたこと、ウルの古拙文書から灌漑・軍事両組織の頂点に立つ支配者像を抽出したもので、シュメール都市国家の行政経済文書の史料価値を原史時代にまで遡らせて再認識させる業績であり、日本シュメール史学はここに独自のスタンダード・ポイントを確立したのである。

「シュメール研究会」発足の六年後、先生の英文著書 *The Sumerian Tablets*…(既出) 刊行の五十一年後、教え子の一人である広島大学文学部言語学研究室吉川守教授を Editor とする欧文専門誌 *Acta Sumerologica* が発刊され、その第一号が日本におけるアッシリア学誕生五十年を記念して、深い感謝と誇りの意をこめて先生に捧げられた。寄稿者八名中、直接先生に教えを受けた者、吉川・山本・前川の三名、三名および同じく最初の教え子の一人小野山節教授に教えを受けたもの、五味・前田・大江の三名、他に、シュメール研究会結成以来のメンバーであるアッシリア学研究者二名があった。此の年誌は本年度十号に達し、諸外国の高名な研究者の寄稿も相ついでおり、アッシリア学・シュメール学

の国際性の中で誕生した我が国の斯学が五十年を経て、個別研究の領域で国際的研究水準に達したばかりでなく、積極的に斯学の進展に寄与しうる段階に達したことの証左として先生の最も欣快とされるところであった。

先生はお若い時代からのクリスチャンであり、御家族もそうであるので、葬儀は三月二十八日、広島市内の日本キリスト教団流川教会において先生が信頼を寄せられていた山根眞三牧師の司式により、厳肅に、全国各地から多数の知人や教えを受けた人々も参集して、とり行なわれた。

(山本 茂 記)